

## 【和歌山の女性誌】季刊「セソング」



NO.94

### 「誤植の2字を額に貼って」 宮中会長のエッセーを掲載

宮中雲子会長のエッセー「誤植の2字を額に貼って」が、和歌山の女性誌季刊「セソング」2013年春号に掲載されています。それを、日本のお手玉の会の「たまちゃん通信」の42号に転載させていただきます。

(紙面の都合で、少し割愛させていただきました。その部分には(途中略)と入れました。また、小見出しは、編集部でつけたものです。ご了承ください。)

### 誤植の2字を額に貼って

宮中 雲子

\*ガリ版刷りから活版の「木曜手帖」に  
童謡と抒情詩の月刊誌「木曜手帖」を活版で発行したいというサトウハチロー先生の熱い思いが実って、昭和三十三年五月「木曜手帖」は創刊されたのでした。

当時、サトウ先生が選者をしていた「サンケイ随筆」の投稿者や、大学の児童文学部の人達をお誘いしての出発で、私も東京学芸大学の先生からのお誘いで、参加したのでした。

それまで木曜手帖はガリ版刷りで数年の間、刊行されてきました。そのガリ版刷りをしてきたのが、若き日の吉岡治さん(2010年歿)でした。「天城越え」で一世を風靡した吉岡さんも、かつてはサトウ先生のところで勉強していたのです。

サトウ先生のところへ、詩を書きたいという人がぼつぼつ訪ねてくるようになった頃から、自宅で週一回木曜日に「木曜会」という勉強会をしていて、そこに集まった作品をガリ版刷りの冊子にしていたのでした。(途中省略)

同人誌で、編集やその他の仕事に関わる人を雇うゆとりはありません。木曜会の仲間や、東京学芸大学出身で小学校の教員をしている数人がサトウ先生を助けて、「木曜手帖」の雑務にあたっていました。

\*大学在学中に月刊誌の編集に携わる

しかし、忙しいサトウ先生を補佐して出版を続けていくのは難しく、東京学芸大学在学中だった私に、それらの仕事が回ってきたのでした。私は中学、高校、大学などで同人誌や、学校新聞に関わってきたので、いくらか出版の仕事が出来たのと、詩のほうではなかなか

芽が出ないままだったことによるものでした。大学を卒業してからは、サトウ家に住み込んで、詩の勉強と「木曜手帖」の仕事に携わりました。(途中略)

編集はサトウ先生を中心に、先輩たちが集まって行なわれましたが、校正となると、サトウ先生からは「みなさんを集まってもらって、出来るだけ沢山の目で見られるように」と言われていても、下っ端の私には召集がかけにくく、自分でやってみようことが多かったのです。

そんなある日、出来たばかりの「木曜手帖」をサトウ先生に見せたところ、しばらくして、校正のミスをごつぱと叱られました。よりによって、サトウ先生の詩についての誤植でした。昭和三十四年十一月二十五日発行の「木曜手帖」は三十二号にあたり、サトウ先生は「雨のオリエンタル」という詩のシリーズの第一回を発表、その二節における誤植でした。

その家は

川に沿うてけむっていた

うつらうつらとけむっていた

はば広い階段と

黒タンマがいの机の足と

よごれて光った絹のひぎの動くのが

外から見られた

その家のつき出た部屋の窓もけむっていた  
ならべられた銀の食器(うつわ)と

口と手を動かしている集いの人々は

片隅にぶらさげられた

鳴らない胡弓を知らなかった

いや 目に入らなかつた

この詩は、また三節四節五節と続きます。どこに校正ミスがあったかというところ集いの人々は